

「太閤検地」前夜における「地主」と「地主の被官」に関する考察

木元英策

〔抄録〕

「太閤検地」の「権力的対応」により中世と近世が「分断」されたという通説に対して、近年は中近世の「継続的側面」が強調されている。しかしながら、中世と近世の連続的側面を明確にするには、権力側の矛盾として現われる戦国期「得分」の主な集積主体（地主）について詳細に検討する必要がある。地主は戦国末期の在地社会における末端の支配層であり、彼らと一般的にいう小作農（＝地主の被官）との関係を検討することにより、本稿の目的が達成され则认为する。本稿はまず、「地主の被官」が土地

に緊縛される存在であることを示した上で、地主の旧跡について、戦国大名が地主の知行地と「知行付被官」を一括して宛行っている事実を確認した。このように、在地社会の末端において「地主の知行地」と「地主の被官」との一体観念が存在していたことに、中世社会に太閤検地を誘引する土壌があったと結論付けた。

キーワード 地主 知行付被官 太閤検地 加地子名主職 作職

はじめに

戦国大名は、主に地主層に集積される戦国期の「得分」（史料に「加地子」、「徳分」などと記される）について、無頓着ともいえる対応をみせている。

「荒地」などの開発田から生じる「百姓内徳」に対しては、事実上

の隠田として取り扱い、関心を示すものの、土地の剰余生産物から年貢諸役などを差し引いた残りとして成立する「得分」（戦国の得分で論点になるのは主にこの形態をいう）については、領国の収取体系に包摂する努力を怠っているようにしか思えない。¹⁾ こうした戦国期の「得分」は、一般的に「太閤検地」によって否定され、集積主体である地主層もまた、階級的に消滅するといわれる。

その太閤検地は「国家的検地」と規定され、実施の裏付けとなる政治的論理として、豊臣秀吉への天皇による全国的支配権の委任に、根源的な成立要因が求められている^③。しかし、こうした通説的な解釈を中心とする研究は、太閤検地を、地主層が体现する矛盾への「権力的対応」であつたと位置づけ、それがために「中世」と「近世」の「分断」を強調するものという批判的な見解が示されるに至つた。このため、近年では逆に「中近世」の「連続的側面」が評価されつつある^④。

もちろん、豊臣政権という全国規模の統一政権をもつてするなら、権力的対応は十分可能であるし、太閤検地が持つ「歴史的意義」までも否定するつもりはないものの、戦国期社会が権力的対応によつて一方的に分断されたという解釈には従えない。さりながら、管見のかぎり、中近世の連続的側面についての明確な解釈が示されているわけではない。もつというなら、太閤検地を経て成立するとされる近世社会に中世社会と連続する側面があるのなら、それはある意味、戦国期末期の在地社会に太閤検地を誘引する土壤があつたことを意味しているといえないだろうか。

本稿の目的はその一点を見極めることにある。またそれは、近世大名と比較される戦国大名が地主に集積される得分に手をつけられなかった理由、つまり無頓着としか思えない対応の理由を探ることに繋がるからである。

以上の目的を達成するには、やはり、太閤検地によつて再編されるとされる階層——地主に焦点を当てる必要がある。『地主』は戦国期の在地社会における末端の支配層であり、一般的に「小作農民」と

呼ばれる階層を被官化していることは先行研究でも指摘されている^⑤。

一方、太閤検地は安良城盛昭氏によつて「小作農民を検地帳に「名付」し、このことを通じて、かつては小作農民であつた「百姓」より年貢を「直納」させた^⑥」と論じられてきた。したがつて、なぜ「地主の被官」（「小作農民」）層から年貢を直納させることが可能となつたのか、その原因を探ることによつて目的を達成できると考えている。

ここである「地主」は、土豪・地侍などとも呼ばれる。戦国大名の被官となるケースでは下級の軍役衆にあたる。「村の侍」という表現で語られることもある。この中間層研究は先学による輝かしい業績が残る分野ながら、依然として、その上層（戦国大名の上級家臣）と混同している例も散見される。一方、戦国期の中間層研究に比べ、「地主の被官」に関する論文はいまだ少ないものの、それでも、勝俣鎮夫氏^⑦、下村孜氏^⑧、太田浩司氏^⑨らによつて一定の見解が示されている。

したがつて、まず地主層についてあらためて整理し、その存在形態を明らかにした上で、複雑にみえる彼らの被官を類型化することによつて問題を洗い出し、両者（地主とその被官）の関係と在地社会との関連性を明らかにしていきたい。

なお、検討するフィールドとして主に北近江と和泉の事例を取り扱う。これは同地域に良質な史料が多く現存しているためであるが、ほかの地域の史料も、論考に関係するものについては、できるだけ使用することとする。

第一章 「地主」の存在形態——北近江・和泉

一 姉川の合戦と地主

近江国坂田郡（北近江）の天野川流域には「嶋記録」^⑫により、国人領主今井氏の被官として嶋・岩脇・井戸村・田那部氏・遠藤氏らの土豪層の名が確認できる。

この天野川流域の今井氏と土豪層との関係については小和田哲夫氏の研究によって明らかになっている^⑬。小和田氏は、国人領主の今井定清が天野川流域の土豪井戸村光慶（小次郎）の父清光の戦功・戦死に対して感状を出していることから、「永禄四年（一五六一）段階における浅井氏の家臣団構成が（中略）浅井—今井—井戸村という方式であったことを証明している」とする。しかしその後、浅井氏は「旧国人系家臣の独立性を次第に否定していく政策をとった」。その根拠の一つとして小和田氏は、同じ天野川流域の土豪嶋氏に、浅井氏が直接知行を宛行っている例を挙げている。こうして国人層に臣従していた土豪（地主）層が戦国大名浅井氏の被官となつてゆく過程が示された。《史料一》「嶋記録所収文書」三六

元亀元年六月廿八日、於野村合戦討死上下合三拾人内、侍分書付申候、此外又若党・定使・中間等略之、
小法士丸十歳

若州子也 親父与介嶋若狭ライ也、

田那部満牟介式部息 川口新十郎 嶋勘右衛門尉飯村住人

（後略）

浅井氏が越前の朝倉氏と連合し、織田・徳川と対決した姉川の合戦は、浅井軍の陣所（浅井郡野村）の名をとつて「野村合戦」とも呼ばれる。《史料一》には、合戦で討ち死にした「上下合三十人」のうち、「侍分」として、後略部分を含めて計十五名が記されている。前述した土豪の嶋一族・田那部一族の名が記載され、さらに「同合戦高名之衆、頸取衆也」と題する別の「嶋記録所収文書」には、

嶋四郎左衛門尉四郎左衛門高名、於戦場磯丹州二頸見せ、又小谷ニテ其頸実検

二入申候事、後々迄磯丹普被申候由忠左モ承候由被申候 感状
ウセ申候、

とある。浅井氏の重臣磯野員昌（国人領主層）の与力・嶋四郎左衛門尉が戦場で敵の頸を挙げ、合戦後、浅井氏の居城小谷へ帰つてから頸実検に供し、後々までの誉れであると讃えられたという。

以上のことから、天野川流域の土豪が一定の武力を持ち、浅井氏の軍役衆としての役割を果たしていたことがわかる。このように、まず彼らが「村の侍」という表現に相応しい存在形態を有している事実を確認しておきたい。ただし、土豪層を「村の侍」という面からのみとらえると、実態を見失う恐れがある。すでに稲葉氏^⑭らが指摘しているとおり、土豪層の実態を把握するには、彼らと村落共同体との関係について考える必要があるからである。そこで、フィールドを和泉地域に移して検討したい。

二 和泉国熊取の「村の侍」——行松氏と中氏

和泉国の惣村熊取に関する研究は三浦圭一氏^⑮にはじまり、先学によ

る研究の盛んなフィールドである。ここでは共に在村が確認される行松氏と中氏の両家を対象に、土豪(地主)層の存在形態を探り出し、同階層の定義を明確にしておく。

(i) 行松氏と中氏の共通点

まず、戦国期の惣村熊取において、十六世紀半ばごろまでの史料から行松氏という「村の侍」の名を拾い上げることができる。その行松氏は和泉守護細川家と被官関係にあり、当主(行松盛吉)の屋敷は小垣内村にあった。この行松氏が守護から給地をたまわる守護給人だったことは、天文十五年(一五四六)の田地売券¹⁶⁾に示されている。売り主は行松又六泉兵衛という行松一族の武士であるが、そこに又六が知行してきた小垣内村の田地の「キウフン(給分)」が「四斗」であったと記載されている。

一方、惣村熊取の御門村に居住が確認できる中氏は、天文十八年(一五四九)に摂津江口の合戦で和泉守護細川家が事実上滅亡して以降、行松氏が没落するのと反対に勃興する。十六世紀半ば以降、とくにその繁栄が顕著となるが、天正十三年(一五八五)三月、秀吉の泉南・紀北侵攻に抗して紀州根来寺方の出城の一つである畠中城に籠城している事実が『根来記』¹⁷⁾によって確認できる。残念ながら、戦国期中氏がどの程度の武力を擁していたかを特定する史料はないものの、近世に熊取村の庄屋へと転身を遂げて以降の中氏は「家中」「内衆」の合計で約七十名の被官を扶持している。¹⁸⁾当然、戦国期にはそれ以上の武力を持っていたと考えられる。

ところで、先の畠中城は本願寺の役人が「百姓持タル城」¹⁹⁾と日記に

書いているとおり、籠城した中氏をはじめとする諸勢は地下身分とみられていた。だからといって、中氏が「村の侍」でなかったわけではない。「侍」という言葉について稲葉氏は「当該期の村落上層の個々人が、既成武士団と被官関係Ⅱ主従関係を結んで、主に「侍」²⁰⁾う存在となった事実を求めることができる」と規定している。中氏の場合、上層の武士集団と主従関係を結んでいなかったため、本願寺役人の目からは「百姓」と映ったのであろう。しかしながら、中氏は売券史料で「中左近太郎殿」などという敬称を付されることもあり、同じ惣村熊取内における身分階層上、一般の惣村構成員より上位に位置していることがわかる。

中氏は和泉山脈南麓(紀州側)に成真院という根来寺の子院を建立し、実質的に戦国大名に比肩される根来寺惣分の被官的立場にあり、一定の武力を持つ「村の侍」である事実には変わりはない。その根来寺は、永正元年(一五〇四)四月五日未明、熊取の集落を放火しようとしたと『政基公旅引付』²¹⁾に記されている。結局、根来寺勢は「熊取之給人共之館三ヶ所(シュンチ・行松・大カイト)」だけを焼き払い、撤収した。根来寺勢が焼き払った守護給人らの屋敷三ヶ所のうち、「行松」はいうまでもなく前述した行松氏を指し、「大カイト」(小垣戸)も、当主(盛吉)の屋敷のあった在所であることから行松氏一族の屋敷と考えられる。「シュンチ」についても、行松一族の屋敷と推測される。²²⁾

当時、和泉国は細川家の支配下に置かれていたから、根来寺が泉南地域進出の足がかりを得るため、細川家被官の行松氏の勢力を排除す

ることが「出張」の理由であったのだろう。こうした泉南地域への根来寺進出の対応として、中氏がその被官的立場に身を置いたことは十分に考えられる。

このような熊取の支配構造をみると、十六世紀半ばまでの「和泉守護細川氏―行松氏」という関係を、半ば以降は「根来寺―中氏」という関係へ置き換えることができるし、その意味では、両氏は共に惣村熊取に在住する「村の侍」であったといえる。このように外観的には行松氏も中氏も同じ存在形態を持っているようにみえてしまうのである。

(ii) 行松氏と中氏の相違点

次に、(イ) 支配地域 (ロ) 経済基盤 (ハ) 村落との関係の三つの項目で両者の相違点を探りたい。

(イ) 支配地域

河内の守護代遊佐長教の子・信教に仕えた行松康忠という河内在住の侍がいる。⁽²⁴⁾ 未詳の人物ながら、この行松康忠と本稿でいう熊取の行松盛吉は同族であると考えられる。つまり、行松一族というのは、河内(康忠)・和泉(盛吉)に割拠する武士集団というところえ方ができよう。さらに、和泉の行松氏は、遠く細川家の版図である四国・伊予新居郡の争乱の際にも兵を出し、守護細川家から同郡内に恩賞の土地を拝領していることもわかつている。⁽²⁵⁾

また、行松氏当主の屋敷跡に比定される「小垣内西遺跡」の発掘調査により、屋敷は十六世紀半ば以降農地になつた可能性が指摘されている。⁽²⁶⁾ 当主の行松盛吉は永禄六年(一五六三)までに死去したことが確認され、その後、熊取関係の史料から行松氏の名が消えることを勘案すると、当主の死去と共に熊取を退去したとみることができると逆になると、熊取の他に所領(給地)を持っていたからこそ、支配力を失った熊取に固執する必要がなく、退去できたともいえる。

一方、中氏は紀州菩提谷周辺に、「中左近池」と呼ばれる溜池を完成させているが、これは根来寺との関係によるものであり、中氏が惣村熊取の外に地盤を築こうとする意欲はみられない。

(ロ) 経済基盤

行松氏と中氏が共に加地子に代表される戦国期の「得分」を経済基盤としていることは売券史料から判明している。とくに中氏は、売券史料で確認できる応永九年(一四〇二)から秀吉の天下統一がなつた直後の天正十九年(一五九二)までに、計四二八筆分の土地から加地子を集積している。⁽²⁸⁾ 一方、行松氏の場合は和泉守護細川家より給地をたまわる給人(被官)であり、加地子とは別に「うわ米三斗八升」(享禄二年十二月)、「キウフン政所へ四斗」(天文十五年十月)などを収取していることも、売券の内容によつて知ることができる。

ここでいう「うわ米」「キウフン」は、荘園公領制でいうところの本年貢相当部分にあたると思われる。すでにこの時代、武家勢力によつて荘園および本年貢収取は浸食され、熊取とはゆるやかな丘陵をへだてた隣の日根野荘の場合、日根野・入山田・井原・鶴原・上郷の各惣村のうち、井原以下の三村は半済などによつて事実上、和泉守護家の支配下に帰属しており、荘園領主九条政基の直務支配が及ぶのは、日根野村と入山田村のみという現実があつた。⁽²⁹⁾ 史料による裏付けはな

いものの、熊取の場合も、荘園領主（立荘は確認できるが、本所・領家とも不明）が収取すべき本年貢を武家勢力に収奪され、行松氏はそれを細川氏から給分として安堵されていたのであろう。

加地子は主に土地の剰余生産物から年貢や諸役を差し引いた残りとして成立しており、この年貢相当分とは成立過程が大きく異なっている。

（八）村落との関係

表（行松氏と中氏の相違点）

| | 行松氏 | 中氏 |
|--------------------|------|------|
| 在村する村落外に所領や地盤を持つ | ○ | × |
| 本年貢相当分を給分として収取している | ○ | ×(?) |
| 在村する村落の宮座運営への関与 | ×(?) | ○ |

窺わせる史料はなく、宮座運営への関与は確認できない。

一方、慶長四年（一五九九）の宮座名簿から、中氏が宮座で指導的な役割を果たしていることが確認できる。その名簿には合計五十四名の年寄衆のうち、敬称を持つ者が五人いる。小垣外村番の「長者様」「小左治様」、朝代村番の「中左近太夫様」「中左太夫様」、そして同じく朝代村番の「西左近殿」である。詳細は宮座名簿が掲載される「先代考拠略」^①や「中家家譜」^②などを参照していただくとして、ここでは概略を述べるにとどめたい。結果からいうと、名簿筆頭の「長者様」と「小左治様」はいずれも戦国期の中氏当主（十四代中左近盛勝）の

三男を指し、盛勝は二男にも「中左太夫」の家を継がせている。同じ朝代村番の「中左近太夫様」はむろん中氏当主のことである。また、「西左近殿」の家と中氏は姻戚関係にあり、慶長四年の時点で「様」や「殿」の敬称を持つ者は、すべて中氏ゆかりの者ばかりということになる。

以上、行松氏と中氏の相違点を整理したものが上記の「表」である。まず行松氏は、本拠から遠く離れた伊予の国に所領を獲得して、必ずしも居住する村落にこだわらない存在であるが、中氏は、逆に加地子こそ居住する村落の外で集積しているものの、支配地域を居住村落の外に広げようという意志は感じられない。また行松氏は加地子のみならず、荘園公領制という本年貢部分相当部分を「給分」として守護から与えられている。給分に相当する年貢諸役と加地子は、前述したとおり別の成立過程を持ち、同じ剰余生産物でも売券には別建てで記載されている。さらに、中氏が惣村の運営をおこなう宮座の指導者である一方、行松氏と宮座との関係が窺えない以上、両氏の存在形態が異なるのは明らかである。

加地子の集積を進める中氏は「村の侍」であると同時に、まさしく「地侍」「土豪」「地主」という表現が相応しい階層であるのに対して、行松氏は明らかに地主とは異なる存在形態を持ち、階層的には「在村し、在地支配を担う守護被官（家臣）」あるいは「国人領主」というべきであろう。

ただ、行松氏も加地子集積を進めており、その意味では国人領主層が地主的な側面を有していることを付記しておきたい。

第二章 「地主の被官」の存在形態——北近江ほか

一 村落の上層民を被官化する地主

前出した《史料一》に記載される姉川合戦で討ち死にした「若党」「定使」「中間」がここである。「地主の被官」である。彼らは地主の軍役に應じる形で出陣したと考えられる。次に掲げる史料は、太閤検地との関連で注目されてきた「井戸村与六作職書付」である。

《史料二》「井戸村文書」四七『改訂近江國坂田郡志』巻六

取成御扶持之作職書付上申候事

い村川原西庄境北ハ春日

おころ

七段小

彦三郎（略押）

かいそへ 五反小□内

壹畝

同

立岩川原但孫左衛門渡り

小

但與六様徳分共ニ御ふち

同

同西のせ河かけ共ニ

壹段半

但與六様御ふち

同

小門前

壹反

同地壹職共ニ御ふち

同

い上

天王前

壹反

是ハ御被官ニ罷成候時御扶持之由候

衛門大郎（略押）

同所

壹反

同

さいから 御被官ニ罷成候時五郎兵衛□にて□□

壹反半

同

からと 是ハ次郎九郎殿作にて候へ共年貢米今迄

半 まとい候て作仕候也

同

立町屋敷

壹畝

同

のせ河原 是ハ與六様徳分共御ふち

壹反

同

かいそへかわら五反小之内

小

是も與六様徳分共御ふち

（中略）

右書上申候作職取成御扶持之處實正明白也自然子々孫々も賣買仕候ハバ、可被成御糺明候随而右之書上外ニかへし置又ハうり申義候ハバ、被聞召□次第二可被召上候猶以御検地之上めんめん名付仕損（指）出仕候共不寄何時召上候共、其時一言之子細申間敷候仍為後日之状如件。

天正拾九年

三月十二日

此使 八郎右衛門（花押）

井戸村與六様旨

この「作職書付」については先学による研究の蓄積がある。³³ 宮川満氏は、井戸村氏が太閤検地の作相（得分）否定政策による名主職（得

分収取の源泉）の没収に対応するため、「作職所有者に秘かに契約させることにより、従来の権利を実質的に存続させようとした」と説明しており、長谷川氏もその見方を踏襲している。³⁴ そのことは、「猶もって御検地の上、めんめん名付け仕り、指し出し仕り候共、何時に寄らず召上げられ候共、その時一言の子細申すまじく」という最後のくだりからも窺うことができる。このため与六は「使」の八郎右衛門に、与六が扶持した作職の権利者を書き上げさせたのである。

ところで、中略した部分を含めると、「書上」の名請人として「おころ彦三郎」と「衛門太郎」を含めて計二八名が記載されており、「御被官ニ罷成」という表現から、まず彼らが井戸村氏の被官になっていることを確認しておきたい。ここで重要なのは「作職」が彼ら被官に対する扶持の対象になっている点である。

「作職」はもともと荘園制度下において、土地を耕作する権利である「職」の一つとして成立したが、荘園制の解体が進む戦国期の村落において、「村民の土地所有権を示す語」³⁵、つまり被官農民の有する権利として呈示されるに至った。作職保有者は土地の剰余生産物の一部を「作職得分」として収取して、さらに上級の権利者である加地子名主職所有者（地主）へ、残る剰余生産物を上納する形となっている。

ここに作職は土地保有権として成立し、その意味でいうと、おころ彦三郎らの被官も実質的には「地主」であるといえる。ただし、土地から剰余生産物の一部を作職得分として収取する権利は、与六から扶持されたものであり（被官側からみると、作職が扶持された土地は知行地という扱いになろう）、戦国大名の被官層が給分をたまわると

同じく、上層権力の承認にもとづいて初めて権利を行使することができ、競合相手の競望から「作職得分」を収取する権利が守られるのである。ここにおいて、荘園制下の作職という諸職は、地主が作職保有者に対して付与する権利へと転化したとみるべきであろう。

一方、封建的主従関係はいうまでもなく、主君が土地の安堵などの見返りに軍役などの奉公を求める制度であり、主に「將軍と守護大名」、「大名とその家臣（上級の軍役衆としての国人領主層）」という形で形成されていた。それが末端の土豪（地主）とその被官層との関係にまで適用され、作職が地主による扶持すなわち安堵の対象になったと考えられる。なお、「與六様徳分共ニ御ふち」という表現によって、地主がその土地から収取する「徳分」（作職所有者が上納する加地子相当部分）も、被官に扶持されるケースのあったことがわかる。

しかも、与六の被官の中には「衛門太郎」といった官途名を持つ者もあり、彼らは身分的に村落の上層を形成する階層と想定される。

《史料三》「中家文書」七七二（『熊取町史 資料編Ⅰ』）

右野田之宮ノ北道ノはたの田儀、公方米之事、我等子孫兄弟之内輪ニ少盛吉ノ大夫殿之時ニ奉公申儀候、雖然密左近殿儀ニ、我等作申候西堂ノ上ノ田儀、加地子無沙汰ニ候て、察左近、御腹立候て、彼作之儀被取上候、然共成真院へ色々わひ事申候て、彼作儀請申候、重而無沙汰仕候ハバ、彼作御上可有候、此外彼野田ノ宮ノ公方米之儀、限永代中寺里江余所よりも違乱成事有間敷候、万一作方より如何違乱申候共、我等内輪より可申候て、万一我等如在候ハバ、如何様成儀可有候、為證文如件、

大ラ

永禄十一年戊辰三月廿日 衛門太郎（略押）

成真院

まいる

この史料には、①野田宮北（惣村熊取内の野田村）の田地の公方年貢について②西堂上（同久保村）の田地の作職について、それぞれ異なる二つの内容が一通の売券に記載されている。

大浦衛門太郎の一族がかつて少盛吉ノ大夫（行松盛吉）に奉公し、野田宮北（野田村）にある田地の年貢納付義務を負っており、「奉公」という文言から、大浦一族は国人領主行松氏の被官であつたと考えられる。ところが、①の後半部で衛門太郎が違乱しない旨を誓約している相手は成真院に代わっている。成真院は前述したとおり、地主層の中氏が建立した根来寺の子院である。中氏は根来寺の武力を背景にして、成真院を隠れ蓑に熊取の支配を強化している。³⁶十六世紀半ば以降、行松氏が熊取の在地支配力を失っており、行松氏の被官だつた大浦一族が永禄十一年（一五六八）当時、すでに成真院の支配を受けていたのだろう。つまり、中氏は成真院を通じて大浦一族を被官層へ組み入れていたとみてよい。

そうになると、別の土地②の権利関係が述べられている事情も理解しやすくなる。②の部分には、衛門太郎による加地子未進に立腹した中氏がその作職を没収したため、衛門太郎が成真院に泣きついた経緯が記されている。中氏が被官層の大浦一族へ作職を扶持し、実際に耕作にあたる下作人からの加地子収取を代行させていたのであろう。

ここに、惣村熊取内における序列関係がみてとれる。ただ、「中氏—大浦一族」という「タテ」の関係はあくまで「地主」と「地主の被官」という個々の視点でとらえた関係である。大浦一族も官途名を持ち、実際に惣村熊取やその宮座（五十四名座）の運営に関与していたと考えられる。惣村構成員としての意味でいうなら、中氏と大浦一族は「ヨコ」の関係で繋がっているのである。

こうしたところに、地主とその被官の関係をめぐる複雑な様相が具現されているといえる。

二 質入れの対象となる「地主の被官」

これまでみてきた村落上層とは類型を異とし、まったく別の存在形態を持つ「地主の被官」を確認しておきたい。

《史料四》「坂本忠敬家文書」四（『新編甲州古文書』第二巻）

甲州橘澤内三百文・同内徳分七貫文・亀澤内山之口壹貫五百文并

名田屋敷被官等之事

右為本給之間、不可有相違之状如件、

天正十年

十二月三日

芝田七九郎

御朱印

奉之

坂本作右衛門尉殿

武田氏滅亡後の天正十年（一五八二）、徳川家が武田氏旧領の地主坂本作右衛門に与えた朱印状である。ここでは橘沢の「内徳分」や亀沢の「名田屋敷被官」などが一括して安堵されており、「名田屋敷被

官」という表現から、名田を保有する坂本作右衛門の屋敷付きの被官自身が安堵の対象になっていることが重要である。これを踏まえ、下村效氏はその被官について「名田主坂本の手作地への賦役労働に従事し、その扶持を受ける非自立的小農¹¹名子的小百姓と考えられる。ただ、家内奴隸的な奴婢ではあるまい」と論じている¹²⁾。

彼らもまた「地主の被官」であるといえるが、下村氏は、一般的な下人（¹¹家内奴隸的な奴婢）と形態を異にするというのである。その理由として、永禄六年（一五六三）に今川氏真が「給恩分」を三河の下級給人田島新左衛門へ宛行つた際の判物（安堵状）をあげている。その判物は「被官七間之分」に対する「棟別押立四分一等之諸役」を「免許」する内容である。田島新左衛門の被官一間ごとに、本来ならば四分一役（今川領国特有の国役）や棟別諸役が課せられることになつており、課税対象になっているという意味において家内奴隸的な奴婢とは一線を画す存在であつたとする。

こうした名子的小百姓も地主の手作地における被官となり、時代は応永年間にまでさかのぼるが、次の史料によつて、彼ら¹¹より隷属性の高い被官層が質入れの対象になつていたことがわかる。

《史料五》「隅田家文書」九九（『和歌山県史』中世史料一）

かり申いせの御はつおせん（以下、判読不能）

右件御りやうそくのふんに、長円かちう代さうてんのつくりこ、いや二郎・同子たまる二人分、永代をかきりて御下人にまいらせ候事しちなり、たのさまたけなくめしつかわれ候へく候、^た□□し
いや二郎かきゅうてんのふんくわのもと下一反、ならひにかワラ

田小、同のうやしき、長円かさうてんのはたけなり、かの下ち田はたけ三ヶ所おあいそゑまいらせ候事しちなり

（中略）

応永廿八年十二月十九日

長円（花押）

伊勢神宮へ納める初穂錢借金の「しち（質）」として、地主と考えられる長円が相伝する「つくりこ」（作り子）の「いや二郎」「同子たまる」二人が差し出されている。

その作り子「いや二郎」の「きゅうてん」（給田）として、「くわのもと下」の一反、「かわら田」の小（一二〇歩）、同じく「のうやしき」にある畠の計三ヶ所があり、それらすべての土地も「あいそゑ（相副）まいらせ候事しち（質）なり」とある。この部分の記載内容により、「いや二郎」父子と共に、長円から扶持された彼らの給地もセットで質入れの対象になっていることがわかる。

このことは重要な論点を含んでおり、次に詳細に検討していくこととする。

第三章 地主と被官との関係および太閤検地との関連

一 「地主の被官」と土地の一体観念

前章において「地主の被官」を類型化し、その存在形態を明らかにしてきたが、その過程で浮上した問題点を整理しておきたい。まず《史料三》で地主の中氏がその被官と考えられる大浦氏の作職に対して「察（中氏の誤りであろう）左近、御腹立候て、彼作之儀被取上候」として、作職を没収している点が重要である。

前述したように封建制の主従関係が作職を媒介として地主とその被官の關係にまで適用され、同時に、莊園制下における「職」の体系が莊園制の崩壊と共に再編され、地主に作職の改替権を与えるに至ったと考えられる。³⁸ 大浦氏が作職の安堵を中氏に求めたのは、おそらく競合關係にある「競望之族」^{やがら}から權利を守ろうとするためであろう。しかしながら、作職を取り上げられてしまつては意味がない。したがつて大浦氏は、中氏が建立した成真院へ泣きつき、かつて行松氏の所領であつた「野田宮」の年貢を成真院に納めることを約して、あらためて作職を「請け申し候」という形にしてみらい、ようやく一件落着いたのである。別の言い方をするなら、地主（この場合は中氏）は、作職の改替権をテコに、被官（同、大浦一族）との主従關係を強化しているといえよう。

一方、戦国期の史料に「知行付被官等」（天正十年の徳川家康安堵状）³⁹などという用語が広汎に登場するが、このことは「地主の被官」を考へるにおいて重要である。

彼らについて勝俣鎮夫氏は「戦国時代において登場した地侍・土豪などとよばれる地主と、そのもとにおける隷属的被官との間には、この人と人との間の主従關係とはタイプの異なる主従關係が存在した」⁴⁰と問題提起し、こうした被官層を「下地の被官」と呼んでいる。本稿で便宜的に「地主の被官」と称してきた階層のことである。勝俣氏の問題提起を受けて、地主とその被官との關係について、いくつか確認しておこうと思う。

《史料五》は、伊勢神宮へ納める初穂錢借金の「しち（質）」とし

て、地主の長円が差し出した「つくりこ」の「いや二郎」「同子たまる」と彼らが長円から扶持された給地（計三ヶ所の田畠）が共に質入れされることを示す史料であつた。三ヶ所の田畠は作り子である「いや二郎」父子が主人の長円から扶持された給地であるが、それはまた、「長円かさうてん（相伝）」の土地でもある。

長円が伊勢神宮へ納める初穂錢を工面するため借り入れをおこなう際、被官か土地のいずれか一方でなく、それをセットで質入れている事実は、それが分離できないものだという認識が当時の在地社会に定着していたことを意味する。一般的な主従關係も所領の安堵を根本に据えており、土地を媒介したものである事実に変わりはないが、主人は安堵した土地を奉公の状況に応じて他の被官に与えることができる。ところが、地主の被官の場合、土地に緊縛される存在であり、逆に土地から被官を引き離すことが難しく、そうした土地と人との一体觀念がすでに応永年間の社会に根付いていたからこそ、長円は借金の担保に、被官と相伝の土地を差し出したのである。

このことは、勝俣氏が『長宗我部氏掟書』の三十七条に示される条項をもとに、「個別的パーソナルな關係を基本とする本来の主従制のあり方からは理解しにくい現象といえるであろう」⁴¹と論じた研究成果に現われている。次に、その掟書の關係部分を掲げる。

《史料六》『長宗我部氏掟書』三七条（『中世法制史料集』第三卷 武家家法Ⅰ）

（前略）知行・相付譜代之事、一度其地頭逐他國、雖令歸參、本知於無知行者、譜代不可相立事、

ここでも、ただ「譜代」と書かず、「知行・相付譜代」と記載されている。いったん地頭が他国へ追われた場合、その後帰参したとしても、「知行・相付譜代」、つまり知行地に緊縛された被官を取り立てることを禁じた規定である。このように戦国大名が旧主による旧被官の取り戻しを禁じる背景には、前述した一体觀念が成立していたためであり、被官の取り戻しは、場合によっては被官が農事に従事する土地の取り戻しを意味するからであろう。それはまた旧主と新主の間で被官をめぐる争論が少なくなかったことを示しているともいえよう。

こうした被官と主人との関係は、主人の手作地で農事にあたる名子的小百姓ら隷属性の高い被官のみならず、第二章で主に検討した村落上層民との関係にもみられることである。

江戸時代初期の事例になるが、信州伊奈地方の慶安四年（一六五
一）の売券に、「披官者文□孫左衛門や文右衛門儀ハ、ふん蔵之田地
ニ付百姓ニ而」と記されているとおり、「文右衛門」らは「ふん蔵」
という在所の「田地ニ付百姓」であった。この被官が持つ「衛門」と
いう官途名は、北近江天野川流域の地主井戸村与六の被官である「衛
門大郎」や和泉の惣村熊取で一族が中氏の被官的立場となった「太
浦（浦）衛門太郎」と同じである。官途名を持つ村落の上層民も、「地主
の被官」という「タテ」の関係でみるなら、「田地ニ付百姓」だった
のである。

以上の結果をもとに、いまいちどフィールドを北近江へ戻して検討
を加えてみたい。

二 「知行地と被官」の一括安堵

北近江地域には戦国大名の浅井久政・長政（賢政）父子二代にわた
り、大名側から地主層へ宛てた書状が比較的よく残っている。いくつ
か例示しておこう。

《史料七》（加藤文書）七（『改訂近江國坂田郡志』巻六所収）

為替地加藤石松跡并被官進之候。御知行不可有異儀候。恐々謹言。

浅井新九郎

賢政（在判）

十二月廿三日

安 文

小堀善介殿

御宿所

《史料八》（同）一二（『同』）

此砌御届御忠節至候。就其加藤内介跡家来共進之候。彌無貳御覚
悟簡要候。恐々謹言。

元亀四

備前守

八月十二日

長政（花押）

上坂八郎右衛門尉殿

御在所

《史料九》「垣見文書」一〇（『同』）

御先知行、下坂藤九郎跡、田付同名衆、跡職返進申候、并為新知
熊谷次郎左衛門遺跡知行、楞嚴院平方百姓、敵方へ罷越者共跡、
進申候、彌御粉骨簡要候、委細同名新内丞可有傳達候、恐々謹言

元亀四

浅備

八月 二日

垣見助左衛門殿

長政（花押）

御宿所

《史料七》は、長政（六角氏との同盟関係を解消して以降、賢政から長政へ改名する）が小堀氏へ発給した下知状の案文である。小堀一族は近江国坂田郡平方荘上郷を本貫地とする大地主である。そのことは、延徳二年（一四九〇）の売券に「十五町之自名」を持つところとからも、明らかである。⁴³ その小堀一族の善介に対して長政が替地として加藤石松跡の宛行いを約している。注目すべきは、「加藤石松跡并被官進之候」とあるくだりである。そこには加藤石松知行地のみならず、地付の被官をあわせて知行するべき旨が記されている。つまり、「人＝被官」と「土地＝知行地」が抱き合わされ、地主の小堀氏に、加藤石松の被官と知行地が一括して宛行われる形となっている。

その加藤一族に関する古文書は「加藤文書」にまとめられ、近江坂田郡西黒田村常喜の加藤家に伝来し、常喜の百姓中に対して栗岡名の「年貢諸公事物」を加藤九郎次郎へ「納所すべし」と命じる永禄九年（一五六六）の長政下知状が伝存していることから、加藤一族は加地子名主職を持ち、名田の年貢徴収を請け負う地主（土豪）層だと理解できる。《史料八》をみると、「加藤内介跡家来共進之」とあり、やはり加藤一族知行の土地および家来が共に上坂八郎右衛門に宛行われている。上坂氏は『江州佐々木南北諸士帳』⁴⁴に「佐々木京極随士」として記載される京極氏被官の国人領主層であるが、ここでも地主の知行地と「地主の被官」（加藤内介家来）が一体化されて八郎右衛門に

与えられている事実が重要である。

加藤内介の知行地ならびに家来が上坂氏に与えられた経緯は不明ながら、同じ月に長政が織田信長に攻められて小谷城で自害して果てるという特殊な状況を考慮すると、加藤内介が籠城衆として討ち死を遂げたため、その遺跡が内介の子弟ではなく、八郎右衛門の「御忠節」に報いる形で宛行われた可能性はあろう。《史料九》をみると、より事情がはつきりしてくる。まず別の史料に「今度籠城」⁴⁵とあり、地主（土豪）層とみられる垣見助左衛門が小谷城の籠城衆であることが確認でき、同じく地主と考えられる熊谷次郎左衛門の「遺跡」とあることから、討ち死にした者の知行地が垣見助左衛門に与えられていることがわかる。

このように平時のみならず、戦時においても地主の「知行地と被官」が一括して安堵されていることは、それが常態化していた可能性を示唆するものである。

以上、太閤検地の前夜というべき戦国期末期の在地社会において、知行地で農事に従事する被官層と知行地を一括して安堵することが常態化していた可能性は、彼ら被官の主人たる地主層が集積する得分（作相）否定政策ひいては農兵分離政策との関連で重要な鍵を担っているといえよう。

結論

太閤検地によって否定される戦国期「得分」の集積主体である地主（土豪）層および「地主の被官」の存在形態や両者の関係を通じ、戦

国期末期の在地社会に太閤検地を誘引する土壤があつたかどうか、臆ろげながらも、その輪郭を浮かび上がらせる成果は得られたと思う。

まず、地主が「村の侍」として戦国大名やそれに比肩する勢力に仕える下級の軍役衆であつた事実と共に、とくに和泉国惣村熊取をフィールドとして検討した結果、主に加地子収取を経済的基盤として、宮座を通じて村落の運営に関わる階層であるとした。

次いで「地主の被官」を、作職を安堵される形で地主（土豪）層と封建的主従関係を結ぶ村落上層に属する形態、地主の名子的子百姓として実際に地主の手作地の農事に従事するなど前記の形態に比べてより従属的な形態の被官とに類型化した。とくに、前記のケースでは、地主は彼らと同じ村落内で「ヨコ」の關係にありながら、主従關係という「タテ」の關係を兼ねる複雑な様相をみせており、地主はいわば、作職の改替権を伝家の宝刀として散らつかせながら、彼ら上層農民と主従關係を維持してきたと考えられる。しかし、この主従關係は本来的な形態と大きく異なり、「地主の被官」が土地と一体化していた事実は「知行付被官」などとして史料に頻繁に登場することのほか、地主の先祖相伝の土地と作り子が共に質入れされる事実などから窺うことができる。

こうして彼ら被官層が村落の上層民であつても、「作職＝土地の耕作権」という意味において、下作人と共に土地に緊縛された形態を有し、土地の耕作権を持つ被官と土地は切り離すことができない關係にあつたといえよう。つまり、地主の知行地に付属する被官はあくまで「知行付被官」であつて「被官」ではない。したがつて、平時であれ

戦時であれ、戦国大名によつて「地主の知行地」と「地主の被官」が一括安堵される状況が常態化していたといえよう。

戦国大名は、このように「地主の被官」が実際に農事に携わる階層であることを理解しつつも、作職所有者が地主の知行地と一体化しているという觀念が存在していること、このほかにも、地主とその被官が「タテ」と「ヨコ」の關係を併せ持つ複雑な在地状況に鑑み、中間搾取層（地主）の存在を認め、彼らを通じて年貢諸公事などの収取を図り、在地支配する方策を選択したものと思われる。前述したように、長政は近江国坂田郡の常喜村の百姓中に対して、年貢や諸公事を地主の加藤氏を通じて納めるように命じている。そうすると、戦国大名が地主に集積される戦国期の「得分」に無頓着な態度をみせる背景として、以上の事情を考慮する必要があるのではなからうか。つまり、戦国大名は複雑な末端の在地支配を地主に委ね、その見返りに加地子をはじめとする得分の収取を一種の特権的な権利として認めたといえる。そこに重層化する社会を容認しようとする戦国大名の中世的な側面が見受けられ、そこが近世大名との大きな相違点の一つであつたともいえよう。

ところが、全国規模における統一政権の出現は、戦国大名が成し遂げられなかった課題をクリアし、前述したように、通説でいうところの小作農民（本稿における「地主の被官」を検地帳に「名付」し、彼らから年貢を「直納」させる意志を示すようになる。太閤検地の実施である。

近江においては、天正十一年（一五八三）の蒲生上郡保内今在家に

対する秀吉の検地帳⁴⁷にみられるとおり、天正年間半ば以降、順次実施されていったとみられる。文禄五年（一五九六）三月、近江佐和山城主の石田三成が東浅井郡の田川村へ宛てた「村掟條々」の第三条を次にあげる。

《史料十》（小室文書）（『改訂近江國坂田郡誌』巻六）

一、田畠さくしきの儀は、此さき御けんちの時、けんち帳にかきのり候者のさハきにつかまつり、人にとられ候事も、又むかし我がさくしきとて人のをとり申事も、ちやうじの事。

ここには、このさき施行される検地の際の作職に関する原則が述べられている。つまり、検地帳に記載される名義人を除き、異論を認めないことを通達した内容である。太閤検地が地主の権利すなわち、戦国期の得点を否定する政策であったことは安良城氏の研究によって明らかにされており、それは「地主の被官」層が「名請け人」として検地帳に記載されることで達成されると理解されている。実際に土地を耕作する下作人にかかわる必要経費などを差し引いた土地の剰余生産物は、主にこれまで「作職保有者」↓加地子名主（地主）という流れで収取され、地主が年貢諸公事を負担する形になっていたが、この流れが太閤検地により、直に作職保有者から年貢を直納する体制が整うことになる。こうして、戦国期の得点が否定され、やがて地主層は階級的に消滅するとされる。

こう考えると、《史料二》で示した天正十九年（一五九一）の「井戸村与六作職書上」はやはり、井戸村氏が扶持した作職を書き上げることにより、「従来の権利を実質的に存続させようとした」とする宮

川氏らの指摘は的を射たものといえよう。こうした地主の対策は、太閤検地の施行原則と矛盾しかねないのであり、《史料十》の「村掟條々」第三条で述べられた内容は、検地帳に記載される「名請人」以外の競望を認めない内容となっている。だからといって、地主の権利は統一政権の一方的な権力的対応によって剝奪されたとは言い難い。

一般的な主従関係は知行地の安堵を中心とする「御恩」と「奉公」の関係であって、それが土地を媒介にしているとはいっても、たとえばそれが国人領主の場合、「給分」という荘園年貢相当部分を収取る権限は、上級権力（守護・戦国大名）によって付与されている。一方、名子的小百姓は別として、とくに作職を媒介にして地主と作職保有者が「主人」と「被官」の関係にある場合、地主にとって付与された作職得分の収取権は、領主権限に基づく給分の収取とはちがいが、主に「買得」という経済行為によって取得した権利である⁴⁸。その意味で一般的な主従関係より不安定であるといえる。しかも、彼らが耕作権を持つ土地に緊縛されているという一体觀念が在地に存在（農業技術的にみても土地の特性をよく知る彼らが土地に従属するのは当然だといえる）し、主人（地主）よりむしろ、土地との繋がりが強固であったとみなすこともできる。

だとするなら、太閤検地がこうした両者（地主とその被官）の關係に着目したことが想定されよう。つまり、太閤検地は戦国期社会を一方的に分断する装置として機能したものではなく、戦国期社会にそれを誘引する土壤があったとみるべきなのである。

しかしながら、以上の論考さらには中近世の連続的側面を証明する

には、地主とその被官との関係についてより深化させた考察が必要となろう。そのひとつが、地主とその被官との関係が一般的な主従関係に比べて分断しやすい関係であったことの証明である。さらに太閤検地をあらためて実効的な側面からとらえなおし、同検地が実施された地域の在地社会がどのように変容したのか——たとえば、検地によって在地社会に存在する戦国期の得点が本当に消滅したのか——などという検討や確認をおこなう必要がある。

〔注〕

- (1) 顕著な例は今川領国である。名主の開発地(本田之荒地)について、天文二十二年(一五五三)に予定される「相改」による打ち出し分を地頭の富士氏に所務させる義元の発給文書がある(『静岡県史料』第二輯所収の「舊大宮司富士文書」)。こうして開発地の開発には積極的な姿勢をみせる一方、弘治元年(一五五五)に地主の神尾氏が抱え置く名職(加地子名主職)から、せつかく五十二貫七〇〇文の増分が打ち出されたものの、十七貫二〇〇文の加地子については、引き続き神尾氏に所務させている(『静岡県史料』第二輯所収の「神尾文書」)。
- (2) 『岩波講座 日本通史 第11巻 近世Ⅰ 一九九三年』の秋澤繁論文(「太閤検地」)
- (3) 長谷川裕子「中近世移行期における土豪の土地所有と村落——近江国坂田郡井戸村氏を事例として——」(『歴史学研究』七四五号、二〇〇一年)
- (4) 前同
- (5) 前同
- (6) 安良城盛昭『太閤検地と石高制』(NHKブックス、一九六九年)
- (7) 藤田達生「村の侍と兵農分離——伊賀の事例を中心に(上)(下)特集・日本中世・近世移行期論の現在——村落論を中心に(上)(下)」

- (8) 『人民の歴史学』一三三・一三四号、九九七年
本稿が参照した論文のみを次に掲げる。黒田基樹「大名被官土豪層の歴史的性格」(『戦国史研究』別冊、二〇〇一年)、西村幸信「中近世移行期における侍衆と在地構造の転換」(『ヒストリア』一五三号、一九九六年)
- (9) 勝俣鎮夫「下地の被官」について(『戦国時代論』岩波書店、一九九六年)
- (10) 下村效「山中」とい「悴者考——結城氏新法度」をめぐって——(『国学院雑誌』89巻11号、一九八八年)
- (11) 太田浩司「北近江土豪層と「被官」——近世史料と現行民俗からのアプローチ——」(三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館、二〇〇〇年)
- (12) 北近江の国人領主今井氏とその家臣の動向を記した史料群をいう。本稿は『滋賀県中世城郭分布調査』7(滋賀県教育委員会、一九九〇)に所収される「鳴記録」を使用した。
- (13) 小和田哲男『近江浅井氏』(新人物往来社、一九七三年)
- (14) 稲葉継陽「中世後期村落の侍身分と兵農分離」(『歴史評論』五二二号、一九九三年)
- (15) 三浦圭一「惣村の起源とその役割」(『史林』(五〇—二・三号、一九六七年三月・五月)
- (16) 「中家文書」五〇五(「中家文書」はすべて『熊取町史 資料編Ⅰ』所収とする)
- (17) 『熊取町史 資料編Ⅱ』所収
- (18) 『熊取町史 本文編』近世編
- (19) 「貝塚御座所日記」(『真宗体系 続』第十六巻、真宗典籍刊行会)所収
- (20) 註(14) 参照
- (21) 根来寺は江戸期の史料「根来寺再建留記」(『根来寺史史料編一』所収)に「紀州・泉州・河州・摂州・四箇国ニテ、五拾万石余領知仕」といわれた。その意志決定機関が「惣分集會」である。一方、泉南

から紀北にかけての地主・土豪層が根来寺の氏人となつて山内に多くの子院を建立しており、彼らの合議で「惣分集会」は運営されていた。ここでは、個別機関である子院に対して根来寺全体という意味を含めて根来寺惣分と記載した。

- (22) 『政基公旅引付』はすべて中世公家日記研究会編『政基公旅引付本文編・研究抄録編・索引編』（和泉書院、一九九六年三月）を使用した。
- (23) 「シュンチ」の「シュン」に「峻」という字をあてれば、惣村熊取内の小谷村にある興蔵寺山北麓の「たんな屋敷」が比定されよう。天文十六年（一五四七）の売券（「中家文書」五四五）に記される行松氏相伝の「たんな（旦那）屋敷」四至書に「南興蔵寺山」とある。興蔵寺山はかつて大内義弘の被官がここに城を築いたこともあるという要害の地であり、標高は一七二メートルながら、実際に登ると急峻なイメージを抱く。
- (24) 岡田謙一「行松入道康忠書状」について（『泉佐野市史研究』六号、二〇〇〇年）
- (25) 「金子文書」の金子元成宛恩賞宛行状（『熊取町史 本文編』中世編所収）
- (26) 『小垣内西遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ』（二〇〇二年）による。調査地点では江戸時代の遺構が皆無だったことから、その後この土地は農地になったものと考えられる。
- (27) 「中家文書」七八九の契状に「（前略）盛吉ノ大夫死去候て、永禄六年ヨリ同元亀三年マテ（後略）」という部分があり、少なくとも永禄六年の時点で盛吉が死去していたことがわかる。
- (28) 註（15）の三浦論文に掲載されたデータによる。
- (29) 廣田浩治「中世後期の九条家家僕と九条家領荘園——九条政基・尚経を中心に」（『国立歴史民俗博物館研究報告』（第一〇四集、〇三年三月）
- (30) 後白河上皇熊野行幸の際に熊取の名主ら五十四名が御輿を担いで奉迎・供奉した旧例によるとされる。
- (31) 『熊取町史紀要』一号所収
- (32) 「中家文書解題」（『和泉国熊取谷中家文書目録』一九八七年）所収
- (33) 宮川満『太閤検地論』第Ⅱ部 太閤検地の基礎的研究（御茶の水書房、一九五七年）ほか
- (34) 註（3）参照
- (35) 神田千里「中世後期の作職売買に関する一考察」（石井進編『中世の村と流通』吉川弘文館、一九九二年）
- (36) 拙論「戦国期の地侍による村落支配の一形態——和泉国熊取谷の「中家文書」分析を中心に——」（『鷹陵史学』三四号、二〇〇八年）
- (37) 註（10）参照
- (38) 「六角式目」二四条（『中世法制史料集』第三卷 武家家法Ⅰ所収）に「年貢所當令無沙汰、下地可上之由申百姓前作職之事」という条項がある。年貢無沙汰に対して作職を取り上げることを規定している。これはあくまで戦国大名六角氏の作職改替権を示す条項であるが、実際に作職保有者から作職を取り上げるのは地主層であつたろう。
- (39) 二四五二文書（『新編甲州古文書』第三卷所収）
- (40) 註（9）参照
- (41) 前同
- (42) 古島敏雄・関島久雄「徭役労働制の崩壊過程」（『古島敏雄著作集』第一卷、東京大学出版会、一九七四年）第三章所収
- (43) 「総持寺文書」二六（『改訂近江国坂田郡誌』巻八）
- (44) 「加藤文書」一〇（『同』巻七）
- (45) 『坂田郡志』中巻
- (46) 「垣見文書」十一（『改訂近江国坂田郡志』巻六）
- (47) 『八日市市史』第三卷（近世）所収
- (48) 註（6）参照
- (49) 「中家文書」ほか、戦国期の売券史料上、多くの売買事例が確認でき

「太閤検地」前夜における「地主」と「地主の被官」に関する考察
(木元英策)

(きもと えいさく) 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導・貝 英幸 准教授)

二〇二一年九月二十八日受理